

アイドルの「おっかけ」は何を追いかけているのか —アイドルオタクの主観的視点からの実践理解—

江南 健志・小川 悠貴

仁愛大学人間学部

What is the Real Purposes OKKAKES Aimed for? :
Practical Understanding from Subjective View of OKKAKES

Kenji ENAMI and Yuki OGAWA

Faculty of Human Studies, Jin-ai University

日本におけるアイドルの熱狂的なファン、すなわちおっかけの存在は若い人々の間で広く浸透し、その楽しみ方は多様化し広範となっている。そのなかでもグループアイドルと呼ばれるアイドルたちは、握手会と呼ばれるイベントでファンと触れ合うという画期的な方法を発明し、おっかけたちから熱烈な支持を集めている。そこで、おっかけたちはアイドルを追いかける先に彼らが本当に追い求めているものとは何かをおっかけたちの視点から理解し、考察することが本稿の目的である。

以上から、おっかけたちの心性理解のためにイベント会場に実際に足を運び、彼らの生の声を拾い集めた。おっかけをしている彼ら彼女らの言動から、単なる一方方向の擬似的恋愛だけではなく、握手という触れ合いを通した「感情の交換／交換」こそがおっかけたちの追い求めるものが重要であると考察するに至った。

キーワード：アイドル、おっかけ、主観的理解、「感情の交換／交歓」

はじめに

日本のエンタテインメント業界に占めるアイドルの地位は無視できないほど影響力を持っている。2000年代以降の趨勢だけを見るだけでも、それまでテレビで歌やダンスを披露して若者の憧れとなっていたアイドルは、特に2010年代以降のインターネットの力を借りて急速に、ファン層、サービスのあり方や露出方法、都心部から地方・地下へと多様かつ広範にその活動領域を広めている。そして、ライブ、握手会、サイン会などの「直接コミュニケーション」、SNS、動画配信、音楽配信などの「ヴァーチャル・コミュニケーション」の高まりにより、アイドルそして、アイドルオタクを取り巻く状況はドラスティックに変化している。

アイドル・エンタテインメントは、スポーツ、演劇、映画などと同様、ファンと呼ばれる熱狂的なファンの応援を基に成立している。植田康孝によると、アイドルのビジネスモデルについて、ファンは「お気に入り」の存在を深く理解し、共感し、支持してくれる。アイドルとは、ファンがいないと何もできない職業であり、ファンから応援してもらい、それにアイドルが頑張りで応えるのが、アイドルのビジネスモデルであるという(植田, 2019b)。

アイドルファンは性別を問わないのだが、特に男性ファンは女性アイドルに対して、潜在的に疑似恋愛的な視線を向ける傾向がある。彼らは、自分が好きな女性アイドルが一生懸命、全身全霊でファンのために自

分たちへの応援歌を歌って踊る姿が愛しい。それゆえ、「アイドルが頑張るから自分も一緒に頑張ろう」という意識のもとでアイドルを応援していると説明されることが多い。しかし、他方では最近のアイドルファンは質的に変化しているとも言われている。かつて、女性アイドルのファンは男性中心であったが、アイドルが発信するメイクやファッションの情報に興味を持つ女性ファンが急増しているとも指摘されている。楽しみ方が多様化した中で、生まれたのが現在のアイドルブームである。

かつてのアイドルはブラウン管や電波の向こうにいて、コンサートや劇場の舞台上に立つ「手の届かない」存在であった。しかし近年では、CDの購入時に付属する握手券を手に入れば直接会いに行き、そしてアイドルと握手できるようになった。いわば「手の届く」存在としてファンの前に現れるようになったのである。

1980年代以降、熱狂的なファンはオタクと呼ばれるとともに、徐々に自らをオタクと自称するようになった。このアイドルオタクと呼ばれる人々は、一種独特の思考や行動様式を有しており、それらは「オタクカルチャー」「オタク行動」などと呼ばれたりしている。それらはアイドルオタクたちの間に濃淡はあれども広く定着しており、オタクは自らの嗜好追及の一つとして、映像・音声コンテンツやその他グッズ購入などの消費活動に没入することが知られている。近年では、このようなコンテンツを求めるのみならず、上述のようにアイドルとの直接のふれあいを求めてコンサートや握手会に頻繁に駆けつけるオタクも多い。このようなオタクは「おっかけ」と呼ばれるのであるが、本稿では彼らを研究と調査の対象とする。

近年、モーニング娘やAKB48といった大勢の女性たちがグループを形成するアイドルブームが巻き起こった。特に、後者はCDと握手券を一緒にし、ファンとアイドルが握手会によって直接触れ合えるというビジネス形態を発明したという点で新たなアイドルファン像を形成したと言っていいだろう。握手会という発明により、それに集うファンの活動も注目されるようになった。それゆえ「おっかけ」の「追う」という行為は「自ら憧れる人との接点を持ちたい」という熱烈

な意思と見ることができる。

本稿では、日常的に触れ合うことのない人々の関係形成の発端となる「追う」という行為を直接観察し、かつ彼ら彼女らに直接聞くこととした。それは、なぜ彼ら彼女らがそこまでして「追いかけて」ようとするのかを明らかにするためである。彼ら、彼女らはなぜ手が届きそうで届かない人を追うのか、男女によって追いかけることや意味の違いが現れるのか、またそのような違いを生み出すものは何なのか。このような問題意識をもとに、本稿を進めることとした。そこで、「おっかけ」と呼ばれる熱狂的なファン達を対象にした参与観察とインタビュー調査から、女性アイドルのおっかけが通常のファン行動との比較を通して、彼らが何を追いかけて何を応援しているのか、つまり彼ら彼女らがアイドルを追い求めるその先にある何かを、おっかけたちの主観的な理解から試みることにする。

本研究の方法は、主に文献調査とフィールドワークである。文献調査では、オタクに関する内容の論文や、女性アイドルに関する雑誌記事や統計資料、論文から展開を整理する。フィールドワークでは、乃木坂46のイベントに実際に足を運び、参与観察と実際にオタクをしている人へのインタビューを実施して考察を行うこととした。

1. 日本における「グループアイドル」の誕生

日本のアイドル略史

本説では、戦後日本のアイドルの歴史に関してかんたんに振り返ることとした。そのため、本説では西条・木内・植田(2016)の論考をもとにすすめていくこととする。

日本におけるアイドルの登場は、1970年代初頭であると言われている。その要因として、下記の2つが挙げられる。1つ目がカラーテレビが普及したことであり、もう1つは、高度経済成長によって家計収入に余裕ができ、子ども達がお小遣いをもらえるようになったことであるという。つまり、アイドルの存立基盤はその登場時から、学生・生徒といった若年層の存在であった。今も昔も、彼ら彼女たちがアイドルをテレビで知り、アイドルが歌う楽曲に魅了され、そのコンサートに行き、グッズを買うという一連の消費行動に支えられていた。

それ以前のスターは、例えば吉永小百合に代表されるように、映画館に足を運んで料金を払って見る事ができる映画スターが主流であり、そのようなスターは高嶺の花であった。一方、家でテレビのスイッチを入れれば接することができる、とても身近に感じられる存在として、テレビアイドルは普及したのである。

つまり、演劇場や銀幕の中で俳優が演じ、歌劇場で歌手が歌うといった「観られ」「聴かれる」存在から、テレビの普及によって若くきれいな歌手が「視られ」「歓声を浴びる」存在へと変質した。

映像と音声を広く一般社会に届けることができるマスメディアとして強大な威力を持つテレビは、同世代に限らずアイドルのファン層を大きく広げる役割を果たすことに成功した。映画スターは映画館に行かないと動いている姿が見ることができない存在であったが、ブラウン管に映るテレビアイドルは映画スターとは違っていた。テレビのスイッチを入れれば、いつでも無料で見られる存在になった。映画スターのような高嶺の花ではなく親しみがあり、視聴者の疑似恋愛の対象にもなれる存在であった。

1961～1971年に、吉沢京子、岡田可愛、紀比呂子、早瀬久美らがテレビドラマのアイドル的女優として活躍する。中でも1970年代秋放送の「おくさまは18歳」に出演した岡崎友紀の人気は凄まじく、視聴率やプロマイドの売り上げは記録的数字となった。しかし、アイドルの厳密な定義はレコードを売ることがメインの「歌謡曲アイドル」と認識されるため、1971年の宝塚音楽学校出身で特に大人びた魅力売り物にした小柳ルミ子、健康的で快活なイメージを押し出した南沙織、丸顔で親しみやすさを前面に押し出した天地真理、1972年麻丘めぐみのレコードデビューをもって、「アイドル」が誕生したと考えるのが一般的である（西条・木内・植田、2016）。

ここで取り上げられているアイドルの天地真理は、歌の小節ごとのポイントで男性ファンが「○○ちゃん」と叫ぶ「コール」が女性アイドル応援の定番パターンとなる契機であった。

これらの1970年代の女性アイドルは「アイドル」

という役柄を演じていたといえよう。この頃の女性アイドルは「トイレにも行かない」「恋愛もしない」という「仮面」をつけてファンに表れた。この「仮面」を取り去って現実社会への復帰行為を社会に示したのが、山口百恵であった。彼女は「引退」することで現実社会への復帰を果たすことになるのだが、同時にアイドルであることを辞めざるを得なかったと言える。このように当時のアイドルは、アイドルとして存在し続けるために仮面をつけて生き続けることが求められていたのであり、それゆえ現実空間に生身で復帰することはアイドルという仮面を脱ぐこととなる。そういう意味では、アイドルを続けたまま現実の社会に復帰することを世間が許さなかったと言えよう。だからこそ、1970年代のアイドルは期間限定の儂い存在であり、ファンにはそこが魅力的であったとも言える。

その後、1980年代になるとアイドルの位相は大きな変化を見せる。1982年に松田聖子がデビューしたのをきっかけに、その後1985年から1987年にかけてアイドル絶頂期を迎える。この頃の特筆すべき出来事として、1985年から「おニャン子クラブ」ブームが始まった事が挙げられる。おニャン子クラブは、ハーモニーやダンスを上手くこなしたそれまでのアイドルのプロフェッショナルリズムに対し、大勢の女の子たちが歌やダンスに関しては高校の学園祭レベルで歌い踊るという、アマチュアリズムを前面に押し出した。これによって、逆にファンにとって親近感を抱きやすい存在となり、「おニャン子クラブ」は、今日のグループアイドルブームの原点となっている。

しかし、1980年代後半から始まった「アイドル冬の時代」は、音楽シーンではアイドルにとって厳しい時代続いた。その中で、1990年代以降の篠原涼子や安室奈美恵はアイドルとしてではなく、アーティストとして売り出され、「アイドル（仮想空間に生息する偶像）」と「実力（現実空間における歌唱やダンスのクオリティの高さを見せるキャラクター）」が融合するハイブリッドなお存在として再定義された。

1997年にオーディション番組「ASAYAN」から登場したモーニング娘。は、あらたなアイドルとして展開して、かつ結果を出した。追加メンバーのオーディションなどで話題を提供し続け、グループアイドル復

権の足掛かりとなり、仮想空間における「偶像」性を求めていた男性ファンが反応して、特に女性アイドルグループを支持するようになった。モーニング娘。の活躍は2000年代半ばからのAKB48に代表されるアイドルユニットに多大な影響を与えた。モーニング娘。を見て育った女の子達が、後年のアイドルユニットの担い手となり、「アイドル戦国時代」と呼ばれる時代を創出して、仮想空間における偶像を見せる「グループアイドル」が社会現象とも言われる復活を果たした。

「オタク」と「おっかけ」の誕生

古くからコレクターやマニアと言われる人々、何らかの事物に深くのめりこむ行為は存在したが、一般的に「オタク」と記す場合にはファンやマニアと区別される。ある対象に関して、ファンがただそれを愛好する人々指すカテゴリー、マニアが愛好が高じてその対象に関するものを収集する人々指すカテゴリーであるのに対して、オタクは対象についての微細にわたる知識と個人が独特の価値観を備えている人々指すカテゴリーであり、対象をいわば自らで縲りコントロールしている。オタクの能動性と独自の価値観という点がファンやマニアと、オタクを分ける点であると思われる。「オタク」をおたくたらしめているのは、やはりその独特のコミュニケーションの様式であり、そうしたコミュニケーションをとりあう集団として認識されたからこそ、少なくとも1980年代に「おたく族」と呼ばれ、奇異な若者達の集合として扱われ、時にはその存在が社会問題視されることもあった。

吉光正絵によると、「ファン」とは「スポーツ・演劇・映画・音楽などで、ある特定の人物（グループ、チームを含む）に対して魅力を感じている人」であるのに対し、「おっかけ」とは、日本の伝統的な芸能ファンの応援行動であり、「オッカケ、追っかけ、追っ掛け、追駆」とも表記されるという（吉光、1997）。また、水野悠子（1998）によると、「追っかけ」という言葉は、明治の中頃のポピュラー芸能である「娘義太夫」を追いかけていた、「追っかけ連」と呼ばれた青年達に由来する。「追っかけ連」の青年達、寄席から寄席へと追っかけ、時には娘義太夫が乗った人力車がかついで運んでいたり、自宅についていたり、おっかけが

高じて娘義太夫と結婚する者までいたという（水野、1998）。

吉光は、具体的なおっかけ行動として、自分の居住地から遠く離れた場所で行われる芸能活動の鑑賞や芸能活動以外の場所での接触を試みる行動を挙げている。すなわち、ライブコンサートなどに観客として参加すること以外に、移動中やプライベート空間での接触待ちなども含まれている。そのために、ライブコンサートのツアーが行われるすべての会場に足を運ぶことや、おっかけの相手であるおっかけ対象に関する24時間体制の情報収集なども行われる（吉光、1997）。

おっかけはその行動だけを見ると、一見ストーカーのように思われる。実際におっかけが暴徒化し、おっかけ対象に対してプライバシーや著作権を侵害したり、怪我を負わせたり、尾行や盗聴などのストーカー行為に走るケースも生じている。しかし、おっかけとストーカーの間には大きな違いが存在する。それは、おっかけ対象を追いかける際に用いる情報は、おっかけ対象がオフィシャルに発信するもの、すなわち誰もが得られる情報であるという点である。ストーカーのように、親密な関係から得られる連絡先や住所などのプライベートな情報、あるいは個人的な感情から行動するのではない。マスコミやインターネットなどが得られるオフィシャルな情報からわかる範囲内で、おっかけは行われるのである。

特にアイドルのおっかけの特徴として、その多くが集団で動く点が挙げられる。吉光は小さいもので3～4人、大きいもので30人前後の集団で、ライブ会場にて出会い、行動を共にする小集団をオッカケ・グループと呼んだ。この集団はライブコンサートやイベントが始まる直前直後に会場付近に集まり、情報交換やそのイベントに関する感想を互いに述べあい、さらにその前後も一緒に買い物をしたり、食事をしたり、同じホテルに泊まったりしながら、おっかけ対象のアイドルやタレントなどのライブコンサート・ツアーやイベントと一緒に回るという傾向があるという（吉光、1997）。

以上より、本稿では「おっかけ」を「アイドルやスポーツ選手などといった好意や憧憬の対象を見るために、自分の時間や労力は惜しまず、それら対象が現れ

る場所にどこまでもついていく行為、もしくは行為者を指す」と定義する。

先行研究に見る「おっかけ」の動機

次に、「おっかけ」たちがなぜ自分の時間や体力、金銭を費やして、おっかけを行うのかについて考えてみたい。その動機には以下の3つがあると考えられる。

まず1つは「疑似恋愛」と呼ばれるものである。先行研究においても指摘されているが、これはファンが応援するファン対象に対して恋愛感情を抱くというものである。ジャニーズ同窓会は、「おっかけの心得」として、「大好きなアイドルの側にいたくてたまらないファンは、タレントに行くのか、帰ること、ずーっと離れたくないからおっかける、それがおっかけ」としている（ジャニーズ同窓会、1996）。そして、「おっかけ対象を所有したい」という願望を持つようになり、自分だけしか知らないおっかけ対象の姿を求め、おっかけを行うのである。これは一般的によく言われる「グルーピー」と呼ばれる女性の心性に近い。

2つ目は「宗教性」である。濱野智史は、AKB48の台頭によりアイドルに宗教性が生まれたことを指摘し、AKB48がもつ宗教のようなものとしかいいようなコミュニケーション・システムの特徴として、「近接性」と「偶然性」を挙げている。「近接性」とは、「会いに行けるアイドル」をコンセプトとし、劇場や握手会などで、極めて近い距離でメンバーとコミュニケーションをとることができるというものである。「偶然性」とは、宗教的経験をもたらし、自分が応援するメンバーとの「関係性」を決定づける最大のファクターであるという。具体的には、公演を行う劇場内に入る順番を決める抽選や、コンサートチケットを購入するための抽選、公演中に応援するメンバーと視線が合うことや、ファンサービスをもらうなどが挙げられる。アイドルグループのファンはあらゆる「偶然性」に身をゆだねながら、自分が応援するメンバーに導かれて、「誰かのために」生きるという示唆を得るのだという（濱野、2012）。

3つ目は、オッカケ・グループの仲間から一目置かれたいという「承認欲求」である。吉光は、おっかけ対象に接触を試みたい心性を複数挙げており、その中

に仲間内で一目置かれたい、すなわち承認を得たいファン同士の関係性への志向があるとしている（吉光、1997）。しかし、吉光は具体的にどのような関係性があるのかを例示するなどの詳細をそこでは述べていない。

オッカケ・グループは、あるおっかけ対象へ好意のみで結ばれた人々で成り立っている。互いに共有しているものが感情しかなかったおっかけ達は、オッカケ・グループ内での人間関係を不安定だと感じているのではないだろうか。このような脆い人間関係を円滑に行うために、おっかけ達は仲間からの承認を欲しており、そのためにおっかけ対象からの「認知（顔と名前を覚えてもらうこと）」を求め、おっかけをしているのではないだろうか。

この「オッカケ・グループの仲間から承認を得るためにおっかけを行う」という動機の背景には、日常生活で所属する学校や会社などにおける人間関係とは異なる、自分だけが作り出すことのできる、好意と憧憬の対象となるアイドルとの刹那的だが直接的なふれあいを作り上げることを追い求めるおっかけ達の心性が現れていると言えよう。すなわち、好きな異性であるアイドルのぬくもりと息遣いを感じるために、ライブコンサートやイベントなどで一瞬ではあるが五感で感じることができる、非日常的な触れ合いのなかにおっかけの動機を見ることができるだろう。

以上より、本稿では上述のおっかけの3つの動機をもとに、手の届くアイドルとのコンサートや握手会に参加するおっかけたちが何を求めているのかについて、実際の調査をもとにして見ていくこととする。

2. 「おっかけ」をおっかけて

調査対象の概要

本研究では、著名なアイドルグループである乃木坂46を追いかけるおっかけ（男性3名、女性2名）を

表1 調査対象者の属性

名前	性別	年齢	居住地	インタビュー場所	調査日	備考
A	男性	38歳	愛知県	名古屋市内の飲食店	2019/7/4	
B	女性	20歳	長野県	京都市内の飲食店	2019/7/7	生誕委員
C	女性	18歳	兵庫県	京都市内の飲食店	2019/7/7	
D	男性	18歳	福岡県	Dさんの自宅	2019/7/21	
E	男性	22歳	石川県	名古屋市内の飲食店	2019/9/7	

対象に質的調査をおこなった。本調査は彼らへの参与観察と対面式のインタビューである。調査対象者の属性は上記の表1のとおりである。以下の5名については、本稿に関する一連の調査への協力要請に事前に応じてもらった上で、データ化している。

参与観察としてのイベント参加

参与観察は乃木坂46のイベント（ライブ2回、握手会2回）に参加し、実際にイベントの行われた現地にておこなった。第二筆者が実際にCDを購入し、ファンの一人として「握手会」に参加した。

「握手会」には「全握」と呼ばれる全国握手会と、「個握」と呼ばれる個別握手会が存在する。全国握手会は、その日の気分で参加できる握手会であり、握手するためにはCDを購入するだけである。時間指定ではなく、予約も不用である。CDショップやAmazonでシングルCD初回限定盤を購入すると、CDの中に「イベント参加券」が封入されているため、それを持って握手会の会場に行く。ちなみに、CDは握手会のようなイベント会場でも販売されているため事前にも買わなくても当日になって追加することも可能である。さらに、全国握手会は握手だけではなく、ミニライブも観ることができる。この握手券は、一般的に「ペア握手」になっている。ペアになるメンバーは全国握手会の約1週間前に発表され、1枚の握手券で2人の乃木坂46のメンバーと握手することが可能となる。つまり、1枚の握手券で二人のアイドルと握手が可能となり、お得感を感じることができる。

一方、個別握手会とは、新曲発売のたびに東京や大阪などで5、6回開催されるものである。握手券に日時と会場、メンバー名が書かれており、指定の日時にそのメンバーと握手できる。これは、事前申し込み制の握手だけのイベントであり、ミニライブが行われることはない。この参加券はCDショップでは購入できず、通常版と呼ばれる1000円のCDが新曲リリースされる1か月以上前から専用サイトで予約販売される。購入者は事前に発表される握手会の日程表を見て、日程・メンバー・時間帯を指定して、握手したいメンバーの握手券が付いたCDを専用の通販サイトで購入する。競争率が高いと抽選になるが、1回に握手する

人数も回数も非常に多いため、一部の超人気メンバーを除けば、かなりの確率で当選する。

個別握手会当日は握手券と身分証明書を持って会場に行くことになる。個別握手会の方が全国握手会より長い時間メンバーと話をすることができる。全国握手会ではメンバーは既定の衣装（制服）だが、個別握手会ではメンバーの衣装は自由であるため、私服やコスプレなど多様な衣装が見ることができる。握手会はアイドルグループにおけるメンバーの人気序列を明確に見せることになり、握手会での対応が人気に直結したり、グループ内でのポジションを左右したりすることにもつながる。握手会でのメンバーの人気は歌唱する際のメンバーの並び順である「フォーメーション」を決める際の基準になるため、メンバーは少しでも人気を高めようと頑張る。その対応によって「神対応」や「塩対応」という言葉が一般用語化されているが、握手会での対応が人気に直結することはよく知られる。何度も握手会に並んだり（「ループ」と呼ばれる）、大量の握手券を一度に出したりする（「複数出し」「まとめ出し」と呼ばれる）熱烈的ファン（「太客」「強ヲタ」と呼ばれる）は、アイドルにとっては上客であり、ありがたい存在であるといえよう。

参与観察をおこなったイベントは、以下の4回である。1回目の調査は2019年7月4日に愛知県名古屋市にあるナゴヤドームにて行われた、乃木坂46のライブ「真夏の全国ツアー2019～愛知公演～」であり、2回目は2019年7月7日に京都府にある京都パルスプラザで行われた「23rd シングル『Sing Out!』発売記念個別握手会～京都会場～」であり、3回目は2019年7月21日に福岡県福岡市にある福岡ヤフオク!ドームで行われた乃木坂46のライブ「真夏の全国ツアー2019～福岡公演～」、4回目は2019年9月7日土曜日に愛知県にあるAichi Sky Expoで行われた「23rd シングル『Sing Out!』発売記念個別握手会～愛知会場～」である。

乃木坂46のライブ「真夏の全国ツアー2019～愛知公演～」、「真夏の全国ツアー2019～福岡公演～」は、15時30分開場、18時開演の21時終演の3時間であった。「23rd シングル『Sing Out!』発売記念個別握手会」は京都会場、愛知会場ともに9時開場、第1部10時～

11時30分、第2部12時～13時30分、第3部14時30分～16時、第4部16時30分～18時、第5部18時30分～20時の終了時間は20時30分であった。

1, 3回目の参与観察の「真夏の全国ツアー2019」では、男女問わず、会場限定のライブTシャツが販売されており、その会場限定のライブTシャツを着てライブに参加している人が多数であった。男性は、推しメンの名前や画像がプリントされているTシャツを自分で作り着ている人もいた。それ以外にも推しメン（ファンが応援するグループの中で、特に熱烈に好意を抱くメンバーのこと）タオル（メンバーの名前が書かれているマフラータオル）を腰に垂らして歩いている人も確認できた。「〇〇推し」と推しメンの名前が書かれているピブス（スポーツなどでチーム分けのために着用するノースリーブシャツのこと）を自作して着ている人もいた。会場に行くと、公式グッズ、非公式グッズにかかわらず、ファンだということを周囲にアピールができるように何かしらのグッズを身に着けていた。

アイドルファンである女性たちは、メンバーが実際に歌番組やライブなどで着用しているような衣装を自作で作し、ライブに参加している人が多い。このような人々は、メンバーと同じ衣装を着たいと自作の衣装を身にまとった友達や、同じ衣装を着ている人々と写真を撮ったり会話したりしていた。このように、自作服は一種のメディアとして同好の士をひきつけ、コミュニケーションを生み、友達、仲間の輪を広げているとも言えるであろう。

開場から2時間後の17時30分になり、入場したら会場内ではライブ前特有のコールがあり、「やっほー」や「俺の嫁、俺の嫁、〇〇（推しメンの名前）さん」など男女関係なく叫んでいた。誰かが言い終わるまでは次の人は言うのを待つという暗黙のルールがあり、基本的に1人ずつ叫んでいく秩序が見られた。特に「嫁コール」は推しメンを恋愛対象としてとらえられていることが顕著にわかる代表例である。興味深いのは、「俺の嫁」と叫んでいるのにもかかわらず、その中には女性の声も飛び交っていたという点である。

その他にライブの曲中にも、決められたコールがあ

り、このコールはメンバーが公式サイトやYouTubeやSHOWROOMなどのSNSで呼びかけているものもある。それ以外は基本ある程度自由のところがあるが、自分の推しメンを叫ぶところ以外は決められてはいないが揃っている。これは、表向きには「このようなコールをしろ」とは言われていないが、ファンの間では一定のコールをしなければならないという暗黙のルールが存在することを示している。ライブ中に、ファンはペンライトを持って振っているが、ペンライトの色はブログなどでメンバーから指定があり、推しメンカラーというものが存在する。メンバーは自分のペンライトカラーを振っている人に向かってファンサービス（ファンサ）をし、何らかの反応を送っている。中には、うちわやスケッチブックに「指さして」「〇〇（推しメンの名前）ずっきゅんして」などのレスの行為を指定するものもみられた。終演後は、会場に入る前に約束した場所に会場の外に出て集合をし、仲のいい「オッカケ・グループ」で集まり、感想やファンサ、レス（レスポンスの略。つまり、反応や返事のこと）をもらったなど報告を行う。その後、みんなの時間があるときは、そのまま食事に行ったり、予定が合わない人は解散したりしていた。

おっかけへのインタビュー

インタビュー調査は、乃木坂46を追いかけているオタク（男性2名、女性3名）に対して実施した。1回目は2019年7月4日に、「世界の山ちゃん本店」にて行われたライブ「真夏の全国ツアー2019～愛知公演～」の意見交換会に参加したAさんにインタビュー調査をおこなった。2回目は2019年7月7日に牛角京都R1下鳥羽店にて行われた「23rdシングル『Sing Out!』発売記念個別握手会～京都会場～」の意見交換会に参加してBさんとCさんにインタビュー調査をおこなった。3回目は2019年7月21日にDさんの自宅にて行われたBBQでライブ「真夏の全国ツアー2019～福岡公演～」の意見交換会に参加してDさんにインタビュー調査をおこなった。4回目は2019年9月7日土曜日に山本屋本店で行われた「23rdシングル『Sing Out!』発売記念個別握手会～愛知会場～」の意見交換会に参加してEさんにインタビュ

一調査をおこなった。

今回のインタビューではインタビュー全員に、「あなたは、自分のことをオタクだと思いますか。それとも、ファンだと思いますか」と聞いた。すると、5人全員が口を揃えて「自分はオタクだと思う。ファンと一緒にされたくない」と答えた。

男性のA氏、D氏、E氏は「アイドルをこんなに本気になって追いかけるのは、オタクだろう。ファンだったら、握手会には参加してないと思うし、オタクになろうと思ってなったのではなく、気付いたら周りからオタクと言われており、そこから、自分のことをオタクだと意識しだした」と答えている。それに対して、女性のB氏、C氏は「私は、そこらへんの量産型のオタクとは違い、本気で推しメンのことを第一に考えて、普段の生活を犠牲にして推しメンに会いに行っている。推しメンのことが本気で好きだし、推しメンのためなら何だってする」と言っていた。実際にB氏は、乃木坂46のあるメンバーを推しており、推しメンの生誕委員の生誕委員長をしている。

ちなみに生誕祭とは、主に個別握手会で行われるイベントであり、それは握手の部の間の休憩時間に行われる。メンバーとの直接の交流が持てる握手会の中でも、特に個別握手会がファンの中で好まれているが、個別握手会は誕生日の前後で一番近い握手会の日が選ばれるのが一般的である。

この生誕祭の大きな特徴が、開催自体が所属事務所などの直接企画ではなくファンの独自開催ということであり、ファン有志が集まって企画して、所属事務所などに許諾を得て行う「運営公認の非公式企画」という体をとっている点にある。握手会会場を使って、メンバーを直接お祝いするという趣旨からも、運営側の許諾・協力は不可避である。生誕委員の仕事として、そのメンバーの誕生日が一番近い握手会で、生誕祭が執り行われる。オープニングからエンディングまでの内容を考え、握手レーンの装飾、ノベルティの製作の指揮をとっていた。普段大学に行きながら、バイトをこなし、家に帰ってから持ち帰った生誕委員の仕事をしている。睡眠時間を削って、推しメンのために指揮をとっているのである。食費を浮かせるために普段はバイトに入り賄いで済ませ、家賃、光熱費、水道代以

外はほとんど推しメンのために費やしているという。これは、全員に当てはまっている。インタビューした全員は、バイト代を生活費以外は極力推しメンのために使い、普段の生活を節約している。それほどまでにして、乃木坂46のファン活動に注力している。

次に「推しメンに会って得られるもの、失われるものはなにか」という趣旨の質問をしたところ、全員が失うものところで金銭的なところを挙げていた。しかし、ここで興味深いのが金銭面で失うものと感じるポイントは違った点にある。まず、A氏は「自分は、Xというアイドルを推していたが、彼女は人気があるため個別握手会では、握手券を他のメンバーを推している人みたいにたくさん取ることができない。個別握手会に至っては、取れても1日3枚が過去最高枚数のためそれ以上に握手券をとれたことはない。そのため、自分は全国握手会の方に力を注いでいるため他の人よりはお金が無くなっていると思う」と述べていた。しかし、A氏は「それ以上に、あの可愛い推しメンに会えた、会話をすることができた、それが自分にとっては幸せです」と語っている。B氏は「推しメンとは同性だから、もう、友達感覚で握手会に行っている。自分が失うものといえば、長野に住んでおりイベントに行くことが常に遠征になるため、移動費が出費の大半を占める。けど、推しメンに会いに行くためなら、この遠征費も痛くはない」「得るものは、もう会って握手をして、会話をするだけで楽しいから満足だけれど、強いて言うなら、芸能人の友達を持ったような感覚になるためちょっとだけ優越感に浸れることだ」と述べていた。C氏は「自分が推している人は自分が理想としている人で自分がなりたいと思う人を現在推している。もちろん可愛いと思う。けど、それ以上に尊敬の方が勝ってしまい推しメンは尊いと思ってしまう。オタクをしていて得られたものは、握手会などで自分の理想とする人に直接、使っている化粧品、ハンドクリーム、化粧の仕方を聞けたこと。失うものは、推しメンはみんなの見本となるような化粧品を使っている、大学生には手が出しにくいものも多々あって、それを買うためには私生活で多少我慢をしないといけない」と述べていた。そこで、「なぜ、そこまで推しメンと同じものにこだわろうとするのか」と問い

たところ、C氏は「全部が全部一緒なもので揃えようとしているわけではない。だけど、少しでも推しメンに似せたいし、推しメンと同じものを購入したことを推しメンに報告したい。正直、自分の肌に合わないものもある。肌に合わないものは使えない。けど、この商品は推しメンとお揃い、それだけで価値がある」と述べていた。

「握手会はどういう気持ちでいくのか」という質問に対しては、E氏以外はみんな「推しメンに会いに行くや、会話を楽しみに行く」と述べていた。しかし、E氏は「俺は、推しメンとデートをしに行くと思って、握手会に行く。推しメンもAさん同様握手券が取りにくいので、衣類にお金を回せるので、勝負服を着て、勝負服の系統を推しメンの好みに合わせて、コーディネートしていきます。握手会は自分と推しメンの公的に用意されたデートの場なんです」と語った。彼は、握手券が取れない分、衣類に出費を回して、推しメンとデートに行っているという感覚で握手会を楽しんでいるのだった。

「この先推しメンにはどのようになってほしいか」と聞いたところ、D氏以外は「CDが発売されるたびに、ポジションや選抜メンバーが変わる。自分の推しメンは他のメンバーよりも前に出たい、もっと映れるポジションに行きたい、選抜メンバーに選ばれたいと思っていると思う。私達は、自分の推しメンがそうやって努力しているのを背中を押すように支えてあげたい。推しメンの夢は自分の夢です。推しメンが目指している場所は、私達オタクが握手を完売させたりしてあげないといけないところ、彼女の頑張りを支えるようなファンでいたいと思っている。」などと答えている中、D氏だけは「推しメンが選抜メンバーを狙っているのは、とても応援したいし、選抜メンバーに選ばれることはとてもおめでたいことだと思う。だけど、推しメンが選抜メンバーに入ってしまうと、今までは握手に行けていたのに、人気になってしまい自分が行きたい数の握手に行けなくなってしまうと思ったらどことなく寂しいというか、悲しいというか。まだ、選抜メンバーに選ばれていないから、どんな気持ちになるかわからないけど、多分、嬉しいけど寂しいような複雑な感情になっていると思う。でも、やっぱり、

推しメンの努力が認められたということだから、推しメンには初選抜おめでとうって直接言いに行きたい。推しメンの前で、感情がぐちゃぐちゃになって泣いてしまいそうだけど。」と述べていた。

「自分がオタクをしていると思うときはいつですか」と聞いたところ、E氏は「イベントに行ったりしているときは、オタクをしていると感じるのは当たり前なんだけど、握手会の休憩時間に、Twitterで知り合ったオタクの人達と会ったりするのだけど、そういう時に、話をして会話が弾んでいくときに、めちゃくちゃオタクしてるなって思う。だって、普通の生活してたら絶対会うことがない人と、趣味でここまで話が広がるんだって思ったら楽しくなっちゃうし、同じ人を推しているから話も合うんですよ。同じ趣味を持った仲間として仲良くはできるし、話をしても楽しい。同じレーンに並んでいる人とも喋りますが、やっぱり自分以外の人が推しメンと握手しているのを考えると妬いちゃいますね。だけど、話すのが嫌とかではなくて、なんなら、オタクの人達と話すことによって自分が知らないこととかも教えてくれたりするので楽しいし、オタクの人と話に行っていると言っても過言じゃないね。一番は推しメンだけ」と述べている。

最後に「何を求めてオタクをしているのか」ということを聞いたところA氏は「難しいけど、アイドルは手が届かないものとして割り切っているから、強いて言うなら、自分の好きなアイドル、推しメンがアイドルの世界の右も左もわからないところから、一人前のアイドルへと成長していく姿を見せてほしい」A氏はアイドルに対して歌やダンスは一般人レベルで良いと感じており、アイドルの成長過程に魅力を見出していた。一方、女性であるC氏は「相手が同性なので、芸能人の友達を持った感覚になる。握手会などで、話す機会があるときに相談に乗ってもらったりしている。自分の知り合いとは関係性がないために、友達には話しにくいことでさえも話すことができる」と述べていた。C氏はアイドルに対して親密性を求めていることができる。日常生活の友達には相談しにくいことも、知り合いに情報を漏らされるという心配がない。そのため、話しやすいと感じることができるのではないだろうか。

3. 結び —考察にかえて—

本論では、乃木坂46のおっかけをしている人達へのインタビューに基づいて、彼ら、彼女らはなぜ手が届きそうで届かない人を追うのかということについて見てきた。アイドルグループの乃木坂46を対象にしてライブ会場での参与観察、乃木坂46のおっかけをしている男性と女性にインタビューをしてきた。以下では、上述の問題意識を立脚点として、先行研究で述べられているおっかけ論に見られるファンのあり方をもとに、ここでは考えていきたい。

今回の調査を通じておっかけ達がおっかけをするための動機づけに関して、一種の擬似恋愛としていることにはある程度理解はできるだろう。この擬似的恋愛は一方の愛情であり、基本的にはアイドルがファンに愛の告白をすることなどありえない。その点では、真の恋愛となることはほぼ不可能だと言えよう。しかし、一方でおっかけたちは推しのアイドルとの交流の中で、互いの心のなかに想起するなにかの存在を確たるものと感じているのである。それは「ポジティブな感情の交換／交歓」とでも言うべきものであると考えられる。

この「感情の交換／交歓」は、前述したオタクの3つの動機のうちでも「宗教性」に近いものだと言えるだろう。確かに、濱野(2012)が説いた「宗教性」はこのあたりの心性をうまく説明している。ただし、既に握手券を手に入れて握手会に参加した時点で「偶然性」はほぼ霧散しているものと言ってよく、また「近接性」は握手券が担保してくれるものと言っていい。つまり、「近接性」と「偶然性」はすでに自明のこととして現場で現れており、それ以上の何かがおっかけたちをひきつけているはずなのだ。

それでは、「承認欲求」という動機からの説明はどうだろうか。確かに仲間内からの承認というのはファン同士のなかでイニシアチブを取るために必要なかもしれない。しかし、今回の調査においてそのような主導権の取り合いのような言動を確認することはできなかった。むしろ、イベント前後で知り合う同好の士の関係では「一目置かれたい」という感情の発露を探すことのほうが難しかった。少し穿った見方をすれば、そこにイベント参加の意義はなく、おっかけたちに承

認されるかどうかという余計な心理ゲームには参加したくないのではないか。

「感情の交換／交歓」は乃木坂46のようなアイドルグループと「おっかけ」との間で生起しており、握手会という場において刹那的に立ち会われ、少なくともおっかけたちの間で深くとどまり続ける。握手という挨拶程度の行為にお金を払ってまでイベント等に参加するのは、毎回通うことにより推しメンの「安心する」顔を継続的に見たいと思うからである。おっかけは敏感にアイドルが発信する安心したというシグナル(しぐさや態度、言葉など)を感じ取り、おっかけ自らも安心し喜ぶ様を示す。このような気持ちのやり取りの中にアイドルとの強いつながりを感じ、おっかけは深い満足感を得ることができる。握手の短い間だけ生じる信頼関係をもとに、お互いが「安心」「満足」「歓び」を与え合っていると確認することこそ、おっかけが推しのアイドルを追い求める先にあるものではないだろうか。単に握手券をお金で買って握手をするというような経済的な価値の交換ではなく、金銭的価値以上に彼ら彼女らが求めているのは、心的交流がもたらす経済に還元されない価値である。確かに、このような肯定的な感情の生起はアイドル自身に現れているのかどうかを確認するすべはなく、その意味では甚だ不確かなものである。しかし、このような「感情の交換／交歓」が生じており、それを実際に自分の目で確認できたという実感によっておっかけ達が自分の行動を自己肯定できる証となるのである。この感情には異性愛的な関係性だけではなく、同性との間にも当然生じてくるものである。

この感情の与え合いが自分達の中で現実味を帯びたときに、金銭的価値から心的交流がもたらす経済に還元されない価値が変わる。この一瞬のために自分の居場所をつくり、その環境に居やすくするためにSNSなどで知り合った共通の趣味を持った仲間と薄い関係性を構築し、「感情の交換／交歓」を形成するのだと言えるだろう。

付記

本稿は、第二筆者による2019年度仁愛大学人間学部コミュニケーション学科卒業論文「ファン行動に関

するフィールドワーク —アイドルのオタク「おっかけ」は何を追いかけているのか— をもとに、再分析したものである。

吉光正絵, 1997, 「オッカケ・グループの形成—日常生活領域で係わる集団における孤立と非日常的生活領域で形成する集団へ

参考文献

- 相田美穂, 2005, 「おたくをめぐる言説の構成—1983年～2005年サブカルチャー史—」『広島修大論集(人文)』46(1):17-58
- 植田康孝, 2019a, 「アイドル・エンタテインメント概説(1)～「デジタル・ディスラプション」が迫るアイドル相転移～」『江戸川大学紀要』29:79-107
- , 2019b, 「アイドル・エンタテインメント概説(3)～アイドルを「推す」「担」行為に見る「ファンダム」～」『江戸川大学紀要』29:133-153
- 香月孝史, 2020, 『乃木坂46のドラマトルギー 演じる身体/フィクション/静かな成熟』青弓社
- , 2014, 『「アイドル」の読み方 混乱する「語り」を問う』青弓社
- 金井洋輔, 藤本貴之, 2015, 「「剥がし」行為に着目したアイドル・エンターテインメントアプリケーション」『情報処理学会研究報告』
- 金愛慶, 小川俊樹, 1997, 「コーピング行動の性差の検討 性役割の観点から」『筑波大学心理学研究』(19):79-90
- 小城英子, 2004, 「ファン心理の構造(1) ファン心理とファン行動の分類」『関西大学院人間科学 社会学・心理学研究』61:191-205
- 西条昇, 木内英太, 植田康孝, 2016, 「アイドルが生息する「現実空間」と「仮想空間」の二重構造～「キャラクター」と「偶像」の合致と乖離～」『江戸川大学紀要』26:199-258
- ジャニーズ同窓会, 1996, 『ジャニーズおっかけマップ』, 鹿砦社
- 圓田浩二, 1998, 「オタク的コミュニケーション—「普通っぽい」アイドルと三つの距離—」『ソシオロジ』67-79
- 田島悠来, 2022, 「「アイドル」を解釈するフレームの「ゆらぎ」をめぐる」香月孝史, 上岡磨奈, 中村香住編著『アイドルについて葛藤しながら考えてみた ジェンダー/パーソナリティ/〈推し〉』
- 難波功士, 2005, 「戦後ユース・サブカルチャーズをめぐる(4):おたく族と渋谷系」『関西学院大学社会学部紀要』99:131-153
- 濱野智史, 2012, 『前田敦子はキリストを超えた—〈宗教〉としてのAKB48』, 筑摩書房
- 水野悠子, 1998, 『知られざる芸能史 娘義太夫—スキャンダルと文化の間』, 中央公論社
- 森貴史, 2020, 『〈現場〉のアイドル文化論 大学教授, ハロプロアイドルに逢いにゆく.』, 関西大学出版部

